

健康文化

ドラゴンズファン

前越 久

私は神戸生まれなので本来なら阪神タイガースのファンのはずである。しかし小学校（当時は国民学校と言っていた）入学後すぐに父が急性肺炎により急逝したため母の郷里である名古屋市に転校してきた。昭和17年のことであった。5年間ほど岐阜県で疎開生活を経験したが、それ以後は愛知県内を転々とし40年以上が経過した。その内30年以上は名古屋市内に住んでいる。そんなことで私自身のDNAも名古屋鬣肩に書き換えられてしまったらしい。現在では根っからのドラキチを名乗っている。去年は、毎朝、新聞を見るのが楽しかったものだが、今年はどうも新聞のスポーツ覧を見る気がしない。前の晩から気分が優れない日が多いからである。90歳に近かった母は生前、野球の試合をTVで観戦しているとき、ときには雨でビショ濡れになりながら何千円も払って野球場へ見に行っている人達を評して、その気がしれないとよく言っていた。鐘や太鼓を打ち鳴らしてあんなに応援したからといって自分自身の利益には何ら関係しないのに、というのがその理由であった。どうも母のDNA配列は、スポーツを見て熱狂する人の配列とは大きく異なっていたのかもしれない。しかし、たかが鬣肩チームが勝ったの、負けたのとはいうものの、そのとき全国の何万、何十万人の野球ファンたちの精神的健康状態に大きく影響していることには間違いがなく、ファン気質というものは金銭では評価できないものらしい。

今年の中日ドラゴンズは、9月に入って首位のジャイアンツとの対戦成績が2勝12敗（9月3日現在）の9.5ゲーム差で3位に転落というから、もう話にならない。思わぬ働きをしたのはバンチとギャラードの2人の外人投手である。この2人がドラゴンズに入団していなかったら現在はどんな結末であったであろうか。おそらく最下位を低迷していることであろう。そんなふうに考えれば、彼等の活躍で今シーズンの終盤まで優勝戦線に踏みとどまって楽しませてくれたことに感謝しなければならないのかもしれない。去年の9月頃のジャイアンツファンは、今年の中の私のように精神衛生状態が非常に悪かったであろうと同情しながら、早めに諦めることとし、ぼちぼち来年の優勝を期待しながら気

分転換し、私自身の精神衛生状態の改善を図る方が得策のようである。私の夢は星野中日ドラゴンズと大島日本ハムファイターズの日本シリーズの実現である。いわゆる、長島監督と王監督の対決を多くのジャイアンツファンが望んでいるように、私の中日ドラゴンズファン版である。

私の長男が結婚したのは、セントラルリーグのペナントレース130試合の最終戦に優勝がかかっていた1994.10.8の例の一戦で、ドラゴンズが惜しくもジャイアンツに優勝をさらわれた年であった。結婚式最後の新郎新婦の親族を代表して私がお礼を述べた中で、このことを引用して、『これからの永い人生の間には、このような屈辱を味わわなければならないことにしばしば遭遇することもあろうが、そんなことに屈することなく、むしろそれをバネにして一層頑張って社会に貢献してほしい』と述べた覚えがある。もし優勝していたら『この栄えあるドラゴンズの優勝した年に結婚式を挙げることができ…』などと述べるはずであったが、急遽上記のように変更しなければならなくなった。

一方、次男はどうゆう訳か子供の頃からずっとジャイアンツファンである。名古屋に本社がある会社に勤務しているが、その会社の殆どの同僚達がドラゴンズファンなのに堂々とジャイアンツファンを名乗っているらしい。趣味のこととはいえ、上司への気遣いもあろうかと思うが、一向に気にしていない倅を気遣う親馬鹿でもある。いい年をしてカーキ色のメガホンやタオルや半纏を持っていて、東京ドームや横浜スタジアムへときどき車で応援に行くから相当のジャイアンツ気遣いといってよい。そんな次男の結婚式のときにも私の最後のお礼の言葉の中でドラゴンズのことを引用している。このときは、『新郎は強烈なジャイアンツファンであるが、新婦は新婦の父君に確認したところドラゴンズファンだそうである。将来、新郎新婦がそろってドラゴンズファンになることを祈っているが、たとえそろってジャイアンツファンになったとしても夫婦が同じ球団のファンになることは、夫婦円満のバロメータが上昇した証しにもなるのでじっくり見守って戴きたい』などと格好をつけて挨拶したことを覚えている。私の期待に反し、結婚式後半年も経たないうちに二人ともジャイアンツファンになってしまった。

一方、まずい結果を生んでしまった例もある。私がまだ現職であった頃、医学部保健学科の新入生歓迎会の席でビールを飲みながら、つい地方から入学して来たジャイアンツファンを名乗る一学生に、『名古屋大学に入学したのだから

これからは当然ドラゴンズファンだよね』と言ったところ、『いやだ、いやだ、絶対にいやだ』と行って向こうの方へ行ってしまったことがあった。その後の懇親会では私の近くに来ることを避けているのではないかと感じるようになったことがしばしばあった。この学生の精神衛生状態を私の一言で悪くしてしまったのではないかと深く反省したところである。人の好き嫌いの感情はそうたやすく変わるものではない例であり、人とのかかわり合いに関し心しておかなければならない事例であった。

それにしても何故ジャイアンツファンがこんなに多いのであろうか。東京在住の者だけでなく日本全国に満遍なくちらばっているから不思議である。どの球団にも全国各地からの出身者が所属しているはずであるから、どの球団でもファンは全国区であつてもよいはずと思うがどうもそうはいかないらしい。それこそ母の言によれば、特に利益が絡んでいるわけでもないのにである。工藤選手や江藤選手が今春ジャイアンツに入団し、金の力で強力な球団を作り上げたと言つて物議を醸しているようであるが、私はこれについてとやかく言うつもりはまったくない。むしろ強いジャイアンツを打ちのめす、もっと強いドラゴンズになることを望むばかりである。もう20-30年以上昔になると思うが、国鉄スワローズに金田正一投手という豪速球投手がいた。国鉄スワローズはいつも最下位に甘んじていたが、金田投手は大黒柱となって弱いチームを引っ張っていたことに非常に好感をもって見ていたことを覚えている。しかし、最後には金田投手もジャイアンツに入団してしまった。ヒトのDNAはどうも強いものに指向するような配列になっているらしい。

天から授かった医療行為はヒト独特の行為であり、ヒト以外の動物にはみられない。この医療行為に、最近、あつてはならない医療過誤ニュースが渦まいている。これは医療従事者の一人々々が患者という弱い人の味方になるべきところ、その精神が欠如した結果によるものではあるまいか。私がドラゴンズファンであるのは、決してドラゴンズが弱いチームだと思つているからではない。地元最良が一つの理由ではあるが、最近の私のドラキチ増幅の要因は、星野監督の強いチームに真っ向から立ち向かい、弱い者の味方の精神が如実にあらわれているその姿勢に惚れ込んでいるからである。 (平成12年9月5日記)

(名古屋大学名誉教授)